資料

プロソーシャルな道徳的判断の発達

宗方比佐子* 二宮克美**,**

THE DEVELOPMENT OF PROSOCIAL MORAL JUDGMENTS

Hisako MUNAKATA AND Katsumi NINOMIYA

The purpose of this study was to investigate the development of prosocial moral judgments in Japanese children and adolescents. The prosocial moral-judgment assessment consisted of four moral dilemmas based on stories used in Eisenberg-Berg(1979) and designed to tap prosocial moral reasoning. One hundred and forty preschool, elementary, junior and senior-high school children were individually interviewed to assess their level of prosocial moral reasoning. The results in terms of prosocial moral judgments indicated that no clear age and sex differences were evident, and that most subjects judged prosocially to each dilemma. When prosocial moral reasonings were coded into moral consideration categories devised by Eisenberg-Berg, responses of older subjects tended to be in higher level of reasoning categories. In general, the number of subjects indicating higher level of prosocial moral reasoning appeared to increase with age. These results seemed to show that the developmental stages of prosocial moral judgments suggested by Eisenberg (1982) were also observed in Japanese children and adolescents.

Key words: prosocial, moral judgment, moral reasoning, children, Eisenberg.

Eisenberg-Berg(1979b)は、「Kohlberg(1969)の提起した道徳的判断の発達理論は、罰、規則、法律、権威、形式的義務などの問題を含んだ道徳的ジレンマについての判断であり、禁止に方向づけられた (prohibition oriented) 側面しか扱っていない」と指摘した。そして、道徳性のポジティブな側面についての道徳的判断の研究が必要であるとして、上に述べた罰や規則などが強調されない文脈で、自己の要求と他者の要求とが抗争する場面についての道徳的判断を研究している (Eisenberg, 1977, 1982, 1983; Eisenberg, Lennon & Roth, 1983; Eisenberg-Berg, 1976, 1979a, 1979b; Eisenberg-Berg & Hand, 1979; Eisenberg-Berg & Mussen, 1978; Eisenberg-Berg & Neal, 1981; Eisenberg-Berg & Roth, 1980; Mussen & Eisenberg-Berg, 1977)。本研

究は、彼女の提起したプロソーシャルな道徳的判断の発達の様相を、できるだけ彼女の研究手続きに近いかたちで、日本の子どもを対象に追試・検討することを目的として計画された。

Eisenberg は、主人公の要求が他者の要求と抗争する場面が描いてある例話を用い、「主人公はどうすべきか」(例えば、助けるべきか助けなくてもよいか)、「なぜそうすべきか」という2つの質問をし、プロソーシャルな判断および理由のデータを得ている。そして、その理由を22のカテゴリーに分け、このカテゴリーへの分類結果をもとに、TABLE 1 に示した6つの発達レベルを設定している。

本研究の具体的な目的は、(1)プロソーシャルな道徳的判断が年齢あるいは性別によって異なるか否か、(2)その判断の理由を Eisenberg のカテゴリーに分類したとき、その結果が年齢や性別によって異なるか否か、さらに(3)6つの発達レベルに分けた時、年齢の上がるにつれレベルの上昇がみられるか、を検討することである。

* 名古屋大学教育学部 (Department of Educational Psychology, Nagoya University)

** 現所属; 愛知学院大学教養部 (now at College of General Education, Aichigakuin University)

TABLE 1 プロソーショナルな道徳的判断の発達レベル

レベルⅠ	「快楽主義的・实际的」志向 道徳的な配慮よりもむしろ利己的、实际的な結果に関心を持っている。 “良い”行動とは、行為者自身の欲求や要求を満たすのに役立つ行動である。他者を助けるあるいは助けない理由は、自己への直接的な利益、将来の互惠性および好きな人あるいは必要な人への気づかいといった考慮である。
レベルⅡ	「他者の要求」志向 たとえ他者の要求が自分の要求と相容れなくても、他者の身体的、物質的、心理的要求に関心をよせる。この関心は、役割取得とか同情の言語的表明、罪悪感のような内面化された感情への言及といった明確なものではなく、ごく単純なことばで表現される。
レベルⅢ	「承認および対人的」志向ならびに「紋切り型」志向 良い人・悪い人あるいは良い行動・悪い行動の紋切り型のイメージ、他者の承認や受容といった考慮が、プロソーシャルに行動するかしないかというこの理由に用いられる。
レベルⅣa	「共感的」志向 判断は、同情的な応答、役割取得、他者の人間性への気づかいといったものを含んでいる。あるいはまた、行為の結果に関連した罪悪感とかポジティブな感情を含んでいる。
レベルⅣb	「移行段階」 助けるあるいは助けない理由の根拠は、内在化された価値、基準、義務および責任性を含んだものであり、他者の権利や尊厳を守ることの必要性に言及する。しかし、これらは明確には述べられない。
レベルⅤ	「強く内在化された段階」 助けるあるいは助けない理由は、内在化された価値、基準や責任性に基づいており、個人と社会の契約上の義務を維持しようとする願望およびすべての人の尊厳、権利、平等についての信念に基づいている。自分自身の価値や受容した基準に従って生きることによる自尊心の維持に関連したポジティブあるいはネガティブな感情も、この段階を特徴づけている。

方 法

被験者

保育園年中児（平均年齢；5歳6か月）、小学1年生（7歳6か月）、小学3年生（9歳4か月）、小学5年生（11歳5か月）、中学1年生（13歳2か月）、中学3年生（15歳4か月）および高校2年生（17歳5か月）の各学年男女それぞれ10名ずつ計140名。

例話

Eisenberg-Berg(1979b)、坂上(1981)を参考に、4つの例話とその例話の内容を簡単な線画にした図版を作成した。4つの例話のうち、2つは被験者と同じぐらいの年齢の主人公が登場し、残り2つは大学生と一般の人が主人公として登場するよう作成した。なお、例話中の主人公の性別は、被験者と同性となるようにした。例話（男子用）は以下に示すとおりである。

〔例話(1)：図版は FIG. 1 参照〕

「ある日、太郎君がお友だちのお誕生会に急いで行くところでした。ひとりの男の子が自転車でころんで泣いていました。その子は、太郎君に『ぼく足をけがしてとても痛いんだ。お医者さんに早く見てもらいたいの、で、ぼくの家へ行って、お母さんをお呼びに来てくれない？』と頼みました。でも、その子のお母さんをお呼びに行っていたら、お誕生会に遅れてしまい、おいしいケーキやアイスクリームはもうなくなるかもしれないし、ゲームにも入れてもらえなくなるかもしれません。』

〔例話(2)〕

「ある日、次郎君が学校のうらを通りかかったら、強そうな男の子が3人で、1人の男の子をとり囲んで、いじめていました。その子は、次郎君を見ると『たすけて！』と頼みました。でも、いじめっ子たちは、大きくて強そうなので、自分も一緒にいじめられるかもしれません。』

〔例話(3)〕

「大学生の山田さんは、友だちから献血するよう頼まれました。というのは、その友だちのお父さんが病院で手術をするのに大量の血液が必要だからです。しかもまわりには同じ血液型の人山田さんしかいなく、普通の5倍もの献血をするように頼まれました。しかし、そんなに多くの献血をすると山田さんも1週間ぐらい病院に入院しなくてはならないので、学校の勉強が遅れてしまいます。』

〔例話(4)〕

「ある村で、人々が夏のあいだいっしょうけんめい働いたのに、秋には村の人々がやっと食べられるだけのお

FIG. 1 例話の図版（タテ19.4×ヨコ27.2cm）

米しかとれませんでした。そのころ、となりの町で、川の水がいっぱいになって汚い水があふれ出し、食べ物がくさってしまいました。となりの町の人々は村の人々に『食べ物を少しでもいいからわけて下さい』と頼みました。村の人々はとなりの町の人々に食べ物をわけてあげると、自分たちも飢えてしまうかもしれません。そうえ、となりの町は村からかなり遠いところにあつて、道路も悪いので、食べ物も簡単には運べません。』

手続き

個別に実験室となる部屋に連れてきて、次のような教示をする。「今から全部で4つのお話を読みます。はじめの2つはあなたと同じくらいの子のお話です。あとの2つは、大人のお話です。それぞれのお話の中では、主人公（中心になる人）がどうしたらよいか困っているところができます。あとでいろいろ質問しますから、よくお話を聞いていてください。」教示を与えた後、対応する図版（中学生以上は例話が書いてあるカード）を示しながら、1つずつ例話を読み聞かせた。例話を理解したことを確認後、「（主人公は*）どうしたらいいでしょうか」、「どうしてそう考えたのですか」と質問した。もし、反応が理解しにくいものであれば、適宜質問をしておいた。なお、反応はすべてテープレコーダーにより録音された。

分析方法

(1) プロソーシャルな道徳的判断

各被験者の判断を、例話ごとに学年別男女別に集計した。その際、全面的に助けるという反応はPとし、少しなら分けてあげる、他の人に頼んで助けてもらうなどの反応はP'とした。助けないあるいは知らない顔をするなどの反応はNPとして分類した。PとP'を分けたのは、P'という条件付きのプロソーシャルな判断が多く見られたためである。

(2) 判断理由の分類

各被験者の判断理由の反応を、例話ごとに Eisenberg-Berg (1979b) の22カテゴリー、および22カテゴリーを集約した10カテゴリーに分類した。1人が複数のカテゴリーにわたって反応した場合は、すべてを数えることとした。140名(男子70名、女子70名)の4つの例話に対する反応を2人の評定者が別々に分類し、評定が不一致の場合は協議の上決定した。全被験者の22カテゴリーへの分類に関する一致率は83.0%であり、評定の客観性は十分高いといえる。22カテゴリーに分類された結果から、自動

的に10カテゴリーへの分類がなされた。以下は各カテゴリーの説明とそのカテゴリーでの典型的反応例である。

①権威と罰に対する強迫的または神秘的考え方

1. 権威と罰に対する強迫的または神秘的考え方…先生に叱られるから

②快楽的理由づけ

2. 実際の快楽的利得…お礼がもらえるから
3. 直接的互恵性…次に困った時助けてもらえるから
4. 親愛関係…友達だから

③快楽的でない実際主義

5. 快楽的でない実際主義…大人の人を呼んだ方がいいから

④他者の要求への関心

6. 他者の身体的物質的要求への関心…けがをしているから
7. 他者の心理的要求への関心…悲しいだろうから

⑤人間性への言及と関心

8. 人間性への言及と関心…お互いさまだから

⑥紋切り型の理由づけ

9. 善い人、悪い人といった紋切り型のイメージ…助けること（人）はいいこと（人）だから
10. 善い行動、悪い行動といった紋切り型のイメージ…助けることは当たり前だから
11. 他者および他者の役割についての紋切り型のイメージ…頼まれたから

⑦承認・対人志向

12. 周囲の人々からの承認と受容志向…お母さんがほめてくれるから

⑧明白な共感志向

13. 同情志向…かわいそうだから
14. 役割取得…自分が相手の立場だったら助けてほしいから

⑨内面化された感情

15. 単純な内面化された肯定的感情および行為の結果についての肯定的感情…助けたら自分がほっとするから
16. 自尊心や自分の価値に応えたことから生じる内面化された肯定的感情…助けたら気分がよくなるから
17. 行為の結果に対する内面化された否定的感情…その子のけがが悪くなら後悔するから
18. 自尊心の喪失や自分の価値に応えなかったことから生じる内面化された否定的感情…助けてあげないと後で自分を責めなくなるから

⑩抽象的で内面化された理由づけ

* 例話ごとに具体名を入れた。例えば、例話(1)では「太郎君はどうしたらいいでしょうか」というように質問した。

TABLE 2 カテゴリーと発達レベルとの関係

発達レベル	10カテゴリー	22カテゴリー
I	① ② ③	1 2 3 4 5
II	④	6 7
III	⑥ ⑦	9 10 11 12
IV a	⑤ ⑧	8 13 14
IV b	⑨	15 16 17 18
V	⑩	19 20 21 22

19. 内面化された法律，規範，価値志向…助ける義務があるから
20. 他者の権利への関心…困っている相手の人にも生きる権利があるから
21. 一般化された互惠性…人々は互いに助け合った方がいいから
22. 社会状況への関心…みんなが助け合ったら社会はもっとよくなるから
- (3) 発達レベルの評定

4つの例話に対する反応の全体を考慮して，発達レベルを決定した。Eisenberg (1982), Eisenberg, Lennon & Roth(1983) によれば，カテゴリーと発達レベルの関係は TABLE 2 のようになる。この関係に基づき，個人の例話ごとに，カテゴリーをレベルに換算した。例えば，例話(1)でカテゴリー6，(2)で7，(3)で2，(4)で6の個人

の例話ごとの発達レベルは，例話(1)でⅡ，(2)でⅡ，(3)でⅠ，(4)でⅡであるので，この個人の発達レベルはⅡの“他者の要求”志向となる。ただし，例話ごとのレベルにばらつきがある場合は，Eisenberg, Lennon & Roth (1983)の換算法に準じた。すなわち，例話(1)でカテゴリー13，(2)で5，(3)で6，(4)で2の個人の例話ごとの発達レベルは，例話(1)でⅣa，(2)でⅠ，(3)でⅡ，(4)でⅠである。この被験者の場合，レベルⅠの反応が50％とレベルⅡ，Ⅳaの反応が25％ずつ出現していると解釈し， $\{(Ⅳ \times 25) + (Ⅱ \times 25) + (Ⅰ \times 50)\} \div 100 = 2.00$ の計算を行い，レベルⅡとする方法である。なお例話間のレベルに大きな隔りがある場合は，2人の評定者が元の反応を吟味し，合議の上決定あるいは保留とした。その結果，6名の保留を除く134名の発達レベルが決定された。

結果と考察

1. プロソーシャルな道徳的判断

プロソーシャルな道徳的判断の結果を，例話ごとに学年別男女別にまとめたのが，TABLE 3 である。例話(1)では，学年間，男女間に差は見られず，90％以上の者が助ける（ケガをしている子の求めに応じて，お母さん呼びに行く）というプロソーシャルな判断（P）をしている。例話(2)では，目上の人（先生や父母など）を呼びに行き，その人たちに助けてもらおうという判断（P'）が，男

TABLE 3 プロソーシャルな道徳的判断

例話	1. 誕生会				2. いじめ				3. 献血				4. 洪水			
	P	NP	その他		P	P'	NP	その他	P	P'	NP	その他	P	P'	NP	その他
年中	男	9	1	0	7	2	0	1	7	0	3	0	9	0	1	0
	女	8	0	2	7	3	0	0	6	3	1	0	8	1	0	1
小1	男	8	1	1	8	2	0	0	5	3	1	1	7	1	1	1
	女	9	0	1	6	4	0	0	7	3	0	0	6	3	0	1
小3	男	10	0	0	7	3	0	0	8	2	0	0	8	1	0	1
	女	9	0	1	4	6	0	0	7	1	0	2	5	5	0	0
小5	男	10	0	0	6	4	0	0	7	1	2	0	4	5	1	0
	女	9	0	1	5	5	0	0	8	1	1	0	9	1	0	0
中1	男	10	0	0	2	7	1	0	5	5	0	0	3	6	0	1
	女	8	0	2	7	2	0	1	9	0	0	1	7	2	1	0
中3	男	9	0	1	1	7	2	0	10	0	0	0	7	1	0	2
	女	10	0	0	4	5	0	1	9	1	0	0	7	0	1	2
高2	男	10	0	0	5	4	1	0	8	2	0	0	5	3	2	0
	女	9	0	1	2	7	1	0	8	2	0	0	5	1	4	0
合計	男	66	2	2	36	29	4	1	50	13	6	1	43	17	5	5
	女	62	0	8	35	32	1	2	54	11	2	3	47	13	6	4

(その他の反応は、どうしたらよいかわからないなどの判断の保留ならびに無答である。)

TABLE 4 学年別・男女別の Moral Consideration Categories

カテゴリー	1 ①	2 3 4 ②	5 ③	6 7 ④	8 ⑤	9 10 11 ⑥	12 ⑦	13 14 ⑧	15 16 17 18 ⑨	19 20 21 22 ⑩	計
男	1	4 0 0	1	16 1	0	0 3 0	0	11 0	0 0 0 0	0 0 0 0	37
年	(1)	(4)	(1)	(17)	(0)	(3)	(0)	(11)	(0)	(0)	(37)
中	0	4 0 0	3	13 0	0	0 0 1	0	14 0	0 0 0 0	0 0 0 0	35
女	(0)	(4)	(3)	(13)	(0)	(1)	(0)	(14)	(0)	(0)	(35)
男	0	9 0 1	4	14 0	0	1 5 1	0	6 0	0 0 0 0	0 0 0 0	41
小	(0)	(10)	(4)	(14)	(0)	(7)	(0)	(6)	(0)	(0)	(41)
1	0	3 0 1	6	6 1	0	0 0 2	0	19 0	0 0 0 0	0 0 0 0	38
女	(0)	(4)	(6)	(7)	(0)	(2)	(0)	(19)	(0)	(0)	(38)
男	0	2 1 1	3	9 1	1	1 12 0	0	8 1	1 0 0 0	0 0 1 0	42
小	(0)	(4)	(3)	(10)	(1)	(13)	(0)	(9)	(1)	(1)	(42)
3	0	8 0 3	6	14 1	0	3 3 1	0	17 1	0 0 1 0	1 0 0 0	59
女	(0)	(11)	(6)	(15)	(0)	(7)	(0)	(18)	(1)	(1)	(59)
男	0	5 4 0	4	11 0	3	2 7 0	0	6 4	0 0 1 0	1 0 0 0	48
小	(0)	(9)	(4)	(11)	(3)	(9)	(0)	(10)	(1)	(1)	(48)
5	1	4 3 0	4	13 0	1	4 0 0	0	11 6	1 0 0 1	9 1 1 0	60
女	(1)	(7)	(4)	(13)	(1)	(4)	(0)	(17)	(2)	(11)	(60)
男	0	10 1 0	8	14 2	0	0 0 1	0	5 3	0 0 0 0	3 0 1 0	48
中	(0)	(11)	(8)	(16)	(0)	(1)	(0)	(8)	(0)	(4)	(48)
1	0	4 1 3	2	14 0	1	0 0 0	0	10 7	0 0 4 0	4 1 0 0	51
女	(0)	(8)	(2)	(14)	(1)	(0)	(0)	(17)	(4)	(5)	(51)
男	0	4 1 2	7	10 0	0	0 2 1	1	3 0	0 0 1 1	11 1 2 0	47
中	(0)	(7)	(7)	(10)	(0)	(3)	(1)	(3)	(2)	(14)	(47)
3	0	2 2 0	5	5 0	1	0 1 1	0	2 3	1 0 6 2	14 0 1 0	46
女	(0)	(4)	(5)	(5)	(1)	(2)	(0)	(5)	(9)	(15)	(46)
男	0	4 0 2	3	8 0	1	0 7 3	2	1 2	0 1 3 0	12 0 1 0	50
高	(0)	(6)	(3)	(8)	(1)	(10)	(2)	(3)	(4)	(13)	(50)
2	0	10 1 1	8	3 0	2	0 1 2	0	3 4	0 1 1 4	16 0 3 0	60
女	(0)	(12)	(8)	(3)	(2)	(3)	(0)	(7)	(6)	(19)	(60)

() 内の数値は10カテゴリーの場合

子では中1、中3に、女子では高2に多く見られる。「自分も一緒にいじめられては意味がない」という理由に見られるように、その場の状況を考慮した実際的な判断を示していると考えられる。いずれにせよ、ほとんどの者が助けを求めている子を見捨てずに、何らかのかたちで助けるという判断をしていると言える。例話(3)では、5倍はいやだけど普通の量ぐらいなら献血するという判断(P')が中1男子でやや目立つものの、全般的には各学年男女とも、献血に必ずするという判断を示している。例話(4)では、少しなら分けてあげるとい判断(P')が、男子では小5、中1に、女子では小3に多く見られる。一方、分けてあげないという判断(NP)は、高2女

子にやや多く見られている。しかし、全般的には求めに応じて分けてあげるとい判断が多いと言える。

以上、全体的に見て、プロソーシャルな道徳的判断に関しては、顕著な年齢差、男女差は見られず、ほとんどの者が助けようという判断をしていると言える。

2. 判断理由の年齢差・男女差

判断理由を22のカテゴリーおよび10のカテゴリーに分類した際の学年別・男女別出現数を示したものが TABLE 4 である。10カテゴリーに分類した場合に関して、学年別に男女差を χ^2 検定した結果、小1 ($p < .05$)、小5 ($p < .001$) で有意差がみられた。これら有意差のみられた学年ではもとより、一般的に女子は男子に比べて、より高次

のCATEGORYに属する反応をする傾向がうかがわれる。

同じく TABLE 4 から、判断理由を10CATEGORYに分類した場合の学年差に関して、男女ともおおむね次のことが言える。CATEGORY①「権威と罰に対する強迫的または神秘的考え方」、⑤「人間性への言及と関心」、⑦「承認・対人志向」の反応出現数は、全学年とも非常に少なかった。また、CATEGORY②「快楽的理由づけ」、③「快楽的でない実際主義」は、どの学年でもほぼ同程度の出現数を示した。すなわち、これら①⑤⑦②③のCATEGORYには、学年間の差異はほとんど読みとれない。他方、CATEGORY④「他者の要求への関心」は、低い学年で頻数が高く、凹凸はあるものの学年の上昇にともなって頻数が減少する傾向がみられる。CATEGORY⑥「紋切り型の理由づけ」、⑧「明白な共感志向」に属する反応は、小学生または中学生のある時期に最も頻繁に出現し、CATEGORY⑥では年中と中1で、⑧では中3と高2で数が少ない。さらに、CATEGORY⑨「内面化された感情」と⑩「抽象的で内面化された理由づけ」は小3以上の学年で出現し、学年が高くなるにつれ出現数も多くなり、中3または高2で最も多くなる。

以上の結果をまとめると、10CATEGORYのうち半数のCATEGORYには年齢に対応する差異はみられないが、残りの半数に関して言えば、高次のCATEGORYになるほ

ど、高い年齢で出現数が増える傾向にあるといえよう。

これらの結果は、Eisenberg-Berg (1979b) が小学2年生から12年生までの被験者を用いた研究において、CATEGORY⑥⑦では年齢と共に下降、CATEGORY⑧⑨⑩では年齢と共に上昇する傾向を確認していること、および低い次元のCATEGORYでは明確な傾向が示されないこととはほぼ対応するものである。

なお、判断理由を例話間で比較検討したところ、例話(2)で他の3つの例話とは若干異なる傾向がみられた。すなわち、いじめられている子どもを助ける状況では、他の例話の状況に比べ、CATEGORY③の「快楽的でない実際主義」に相当する反応が多く、CATEGORY④「他者の要求への関心」に相当する反応が少なかった。これは、この例話で P' の判断が多かったことと対応していると思われる。このことを除けば全般的には例話間の判断理由に大きな差異は見られなかった。

3. 発達レベルに関する年齢差・男女差

発達レベルの学年別・男女別分布を示したものが、TABLE 5 である。各学年ごとに男女差を χ^2 検定したところ、どの学年にも有意な差は見られなかった。そこで、男女を合計した数値に基づき、発達レベルにおける学年間の違いを調べることにする。FIG. 2 は、男女を合計した場合の発達レベルの学年別分布である。FIG. 2 か

FIG. 2 発達レベルの学年別分布

ら各レベルについて、次のような傾向が読みとれる。レベルⅠ「“快楽主義的・実際の”志向」の者は、どの学年でも割合が低い。レベルⅠを示す者は小1に多く、中3、高2ではほとんどいないが、小5、中1では年中、小3より割合が高い。低学年の者ほどレベルⅠをとる者が多いだろうという予想とは多少異なっている。レベルⅡ「“他者の要求”志向」は、年中、小1、中1の約半数(47.1~55.0%)が示すレベルである。中1を除けば、このレベルを示す者の割合は学年の上昇と共に減少する。レベルⅢ「“承認および対人的”志向ならびに“紋切り型”志向」の者は、小3、小5で比較的多く、それより低い学年や高い学年では少ない。レベルⅣa「“共感的”志向」の者の割合は、年中児から既に30%と高く、小3、小5、中1も同程度の割合を示す。中3、高2では減少の傾向がみられる。レベルⅣb「移行段階」とレベルⅤ「強く内在化された段階」は、小5になって初めて出現する。レベルⅣbは小5、中1では5.3%と低い割合であるが、中3、高2では55.0%、60.0%と高い割合を示す。他方、レベルⅤの者は中1にはみられず、小5、中3、高2の各学年でも5.0~10.0%と常に少数にとどまっている。

以上の結果をまとめると、レベルⅠとⅡは年齢と共に減少、レベルⅢとⅣaは1度増加しその後減少、レベルⅣbは小5になって出現しその後増加するという傾向がうかがえる。ただし、これらの傾向と相反する結果も一部に見られた。すなわち、(1)中1は小3、小5に比べてレベルⅡの者が増え、レベルⅢが見られなかったこと、(2)高年齢でもレベルⅠ・Ⅱの割合が予想される程減少せず、レベルⅣaの割合は逆に低年齢でもかなり高かったことの2点である。

第1の点に関しては、サンプリングの問題であるのか、特別な発達の意味が含まれているのかは今回の研究からは不明である。Kohlbergの道徳的判断の発達段階を追試、検討した山岸(1976)は、中2が小5より低いステージを多く選択するという結果を示し、「視点が未分化であるためでなく、自ら低いステージの志向を選ぶ者もあると思われる」と討論している。本研究の場合でも、小学生に模範的解答が多いのに対して、中1では「自分も大切だから」という本音や、「自分の力では無理だ」という現実認識が多く含まれていた(たとえば、はじめの例話でP'の反応が年齢の高い者ほど多かった)。しかし、いずれにせよこの問題は今後に残された課題である。

第2の点は、Eisenbergのレベルやカテゴリーの設定に起因する若干の疑問と関連している。すなわち、「他の人に頼んだ方が効果的だから」というような現実には

した実際主義的反応(カテゴリー③)は、「自分がいじめられるといやだから」というような快楽主義的反応(カテゴリー②)とはかなり性質の異なるものであると考えられるが、同じレベルⅠに含まれること、カテゴリー⑤の「かわいそうだから」という反応は低年齢でも多数出現するが、低年齢の者の「かわいそうだから」という反応がレベルⅣaとしての共感的意味を有しているかどうかという点である。これらのカテゴリーをレベルに換算する時、単純にEisenbergの評定に従ったことが、この結果につながっていると考えることもできる。この点についてさらに多くのデータを収集し、検討を加える必要があろう。その結果、場合によっては、Eisenbergのレベルの評定に若干の修正を必要とするかもしれない。

4. 全体的考察

本研究は、Eisenbergの提起した方法に基づき、日本の子どものプロソーシャルな道徳的判断の発達を描写することを目的に進められたが、得られた結果全体をふまえ、今1度性差および発達レベルの順序性について検討を加えることにする。

(1) 性差について

これまで、Eisenbergの方法に基づいたプロソーシャルな道徳的判断の研究においては、明確な性差は報告されていない。今回の研究でも、カテゴリーに分類した際の比較においては、女子の方がより高次のカテゴリーに属する反応を示すという性差の見られた年齢もあった(TABLE 4)が、発達レベルに換算した場合の比較では、どの年齢にも統計的に有意な性差は見出されなかった(TABLE 5)。また、プロソーシャルな道徳的判断のみを男女で比較した場合にも、顕著な差は見られなかった(TABLE 3)。このことから、全般にプロソーシャルな道徳的判断には、明確な性差は見られないと言っていいだろう。

(2) 年齢差から推測される発達レベルの順序性について

Eisenberg(1977)およびMussen & Eisenberg-Berg(1977)によるレベルの移行は次のようである**。「レベルⅠは小学生に顕著であり、レベルⅢも小学生に多かった。レベルⅣaは中高生で1番多く見られた考え方であり、レベルⅤは中高生になると多くなるが特に高校生で多い。」この記述に比べると、今回得られた結果は発達レベルの順序性を支持する傾向にあるものの、いく分不明瞭であった。Eisenberg自身、「未熟な型の理由づけは、

** これらの論文におけるレベルの設定は、より最近の論文(Eisenberg, 1982)でのレベル設定とは、若干異なるが、ここではすべてEisenberg(1982)によるレベルにそって表現した。

TABLE 5 発達レベルの学年別・男女別分布

レベル	I	II	III	IVa	IVb	V	計
年中男	1	5	1	3	0	0	10
年中女	2	11	1	6	0	0	20
小1男	3	5	1	0	0	0	9
小1女	4	8	2	3	0	0	17
小3男	1	2	4	3	0	0	10
小3女	2	6	6	5	0	0	19
小5男	2	1	4	2	0	0	9
小5女	3	4	4	6	1	1	19
中1男	2	5	0	2	0	0	9
中1女	3	9	0	6	1	0	19
中3男	1	2	0	1	5	1	10
中3女	0	2	1	2	6	1	10
高2男	0	1	2	2	4	1	10
高2女	0	2	2	3	8	0	10

年齢と共に頻度を減ずる一方、児童期の理由づけの様式は最も年長の者によっても場合によっては使われる。」(Eisenberg, 1982)と述べているように、レベルの進行は必ずしも単調なものではないと考えられる。今後どのような条件のもとでレベルの全般的な進行が促進されるのかを明らかにして行くことが課題であろう。また、実際場面でのプロソーシャルな行動とプロソーシャルな道徳的判断の発達レベルとの関連を検討していくことも今後必要であろう。

引用文献

- Eisenberg, N. 1977 The development of prosocial moral judgment and its correlates. *Dissertation Abstracts Internatioal*, 37, 4753B.
- Eisenberg, N. 1982 The development of reasoning regarding prosocial behavior. In N. Eisenberg (Ed.) *The development of prosocial behavior*. New York: Academic Press.
- Eisenberg, N. 1983 Children's differentiations among potential recipients of aid. *Child Development*, 54, 594-602.
- Eisenberg, N., Lennon, R., & Roth, K. 1983 Prosocial development: A longitudinal study. *Developmental Psychology*, 19, 846-855.

Eisenberg-Berg, N. 1976 The relation of political attitudes to constraint-oriented and prosocial moral reasoning. *Developmental Psychology*, 12, 552-553.

Eisenberg-Berg, N. 1979a Relationship of prosocial moral reasoning to altruism, political liberalism, and intelligence. *Developmental Psychology*, 15, 87-89.

Eisenberg-Berg, N. 1979b Development of children's prosocial moral judgment. *Developmental Psychology*, 15, 128-137.

Eisenberg-Berg, N., & Hand, M. 1979 The relationship of preschoolers' reasoning about prosocial moral conflicts to prosocial behavior. *Child Development*, 50, 356-363.

Eisenberg-Berg, N., & Mussen, P. 1978 Empathy and moral development in adolescence. *Developmental Psychology*, 14, 185-186.

Eisenberg-Berg, N., & Neal, C. 1981 Children's moral reasoning about self and others: Effects of identity of the story character and cost of helping. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 7, 17-23.

Eisenberg-Berg, N., & Roth, K. 1980 Development of young children's prosocial moral judgment: A longitudinal follow-up. *Developmental Psychology*, 16, 375-376.

Kohlberg, L. 1969 Stage and sequence: The cognitive developmental approach to socialization. In D. Goslin (Ed.) *Handbook of socialization theory and research*. Chicago: Rand McNally.

Mussen, P., & Eisenberg-Berg, N. 1977 *Roots of caring, sharing, and helping: The development of prosocial behavior in children*. San Francisco: Freeman.

坂上道子 1981 Prosocial moral judgmentの構造 日本教育心理学会第23回総会発表論文集 376-377.

山岸明子 1976 道徳判断の発達 教育心理学研究, 24, 97-106.

(1984年11月22日受稿)